

(様式1)

平成26年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

(整理番号) 106	提案機関名 JA かながわ西湘
要望問題名 漬け梅用品種 十郎の着果の安定技術について	
要望問題の内容 【 背景、内容、対象地域及び規模(面積、数量等) 】 漬け梅用品種である十郎は開花時期が早いため、ミツバチを導入しても年次により着果が安定していない。これは生産者としても焦眉の問題であり、生産量が安定しないため、地元漬物業者への供給も安定しておらず、地域経済への影響をもたらしている。 生産量を安定させるために、試験研究をお願いしたい。 ※尚、平成25年に十郎小町の苗木を試験導入します。	
解決希望年限	①1年以内 <input checked="" type="checkbox"/> ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
対応を希望する研究機関名	<input checked="" type="checkbox"/> ①農業技術センター ②畜産技術所 ③水産技術センター ④自然環境保全センター
備考	

※ ここから下の欄は、回答者が記入してください。

回答機関名	農業技術センター	担当部所	生産技術部果樹花き研究課
対応区分	①実施 ②実施中 ③継続検討 ④実施済 <input checked="" type="checkbox"/> ⑤調査指導対応 ⑥現地対応 ⑦実施不可		
試験研究課題名	(①、②、④の場合)		
対応の内容等	ウメの生産安定のためには受粉樹と訪花昆虫の確保が重要となりますが、‘十郎’は開花期が早いことから受粉樹が少ない環境にあると考えられます。特に近年の暖冬の影響により‘十郎’の開花期が前進化し、‘南高’などとの開花期の重なりが少ない状況になっています。 当所で育成した‘十郎小町’は‘十郎’と同様に開花期は早いものの、現地(小田原)での結実が安定しており、‘十郎’との交雑和合性もあることから、‘十郎’の受粉樹としても有効であると期待されます(平成24年度成果)。また、‘十郎’と開花期が重なる小梅等の混植も有効と考えられます。 ‘十郎小町’は今後‘十郎’の姉妹ブランド品種としても発展が期待できる品種ですが、実際に導入した場合の結実性や新品種導入による既存品種の結実率向上についての知見はまだ不足しているため、今後現地調査を進めます。現地試験園としてジョイント仕立てによる混植園を設置し、両品種の着果安定性を調査するとともに、他品種との混植事例の収集と情報提供に努めます。		
解決予定年限	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内		
備考			